

西東京市役所 FSプログラム 児童館キャンプ

プログラム概要	： 指導員として児童の引率
実習先	： 高尾の森わくわくビレッジ（東京都八王子市） 高尾の森自然学校（東京都八王子市）
実習先情報	： 高尾の森自然学校 東京都とセブンイレブン記念財団が「民間主体との協働による緑地保全モデル事業に関する協定」を締結し、自然環境の保全と環境体験学習を推進する新たな協働事業を実施している施設である。 高尾の森わくわくビレッジ 東京都との契約に基づくPFI事業として、地域に密着してきた京王グループと、青少年の社会教育に貢献してきた東京YMCAグループが、ノウハウをいかし総力をあげて運営に取り組んでいる施設である。
本学担当教員	： 水越俊行
参加人数	： 学生10名 児童70名、指導員10名、児童館役員
参加学科	： 教育学科、幼児教育学科、データサイエンス学科、GB学科
実習期間	： 令和6年8月26日～令和6年8月27日

○はじめに

私は現在、教育学科で先生を目指して勉学に励んでいる。しかし高等学校の教員になりたい理由は明確には定まっていない。今までは“自分の好きな今現在はことを仕事にしたい”や“部活動の顧問をしたい”、漠然とした“子どもに関わりたい”という思いから教員を志望してきたが、教員を志望しているのであれば「将来どのような世の中にしたくて、そのために子どもたちにはどのような大人になってほしいのか」「私は何歳の子どもを相手に教員をしたいのか」「将来なんの仕事に就きたいのか」を今一度しっかりと考えるべきだと思い、このプログラムに参加した。

またこの実習を通して、今まで私が経験してきた生徒側の視点ではなく教員側の引率する立場を経験し、児童への接し方を考えるきっかけを作りたいと思う。この経験をもとに2年次から始まる指導法や模擬授業、実際に教員となったときの普段の授業や校外学習、宿泊学習に活かしていきたい。

このような思いから、FSにおける目標を以下の3つに定める。

〈目標〉

- ①生徒側ではなく、教員側の立場であることを理解し、視野を広く持てるよう心がける。
- ②スタッフでもありながら本気で楽しむ。
- ③宿泊学習、野外学習の引率を経験し、将来どんな職に就きたいか今一度考える。

○実習内容

・1班につき参加児童14人（女子：7人、男子：7人）に対して児童館役員1人、指導員（武蔵野大学生）2人がつき、活動する。

ex)食事の面では班の席にスタッフ一人が座って一緒にご飯を食べました。

野外活動では楽しみながらもケガをしないように常に目を離さず見守った。トイレなど動きが分かる行動でも人数の把握や確認を怠らなかった。

・参加児童7人（女子：7人）に対して指導員（武蔵野大学生）1人がつき、宿泊部屋内での活動を行う。

ex)お風呂では転んでけがをしないように見守ったり、脱衣場が汚れないようにタオルを持たせた。また睡眠、退室時の指示もスムーズにいった。

○提案したこと、発信したこと等

- ・親子説明会にて、参加児童と活動内容について話し合うときに子どもたちの中でやりたいことが分かれていたため、天気予報や自由時間の長さなどを考慮したうえで子どもたちにも分かりやすいように提案した。
- ・子どもたちの体調や気分の変化にいち早く気づき、担当の児童館職員に知らせることができた。
- ・たくさん子どもたちがいる中で誰か一人が仲間はずれにならないように気を配り、一人になりそうな子には積極的に話しかけて子どもたちの輪の中にはいれるように働きかけた。

○経験したこと、学んだこと

- ・子どもたちに話や指示を聞いてほしいときに、すぐに静かにならなかつたり周りかきにぎやかで声に気づいていないときがあった。周りの児童館職員の指示の出し方を参考にしようと思いまわりを見渡してみると、挙手や手をたたくなど、動作をすることによって、にぎやかな場所でも気づいてもらえるようにしていたり、自身の近くについて気づいてくれている子どもたちに「まわりのみんなにも教えてあげて」というように、子どもたちにも協力を仰いだりなど、様々な工夫をして話や指示を聞いてもらえるようにしていたことが分かった。私も指示を出すときに実践してみるとすぐに指示が通り、今までよりも成長できた気がして嬉しかった。
- ・小学生のときは人数確認の時間がなぜあるのか、早く次にいきたいのになぜすぐにかかせてくれないのか、とっていたが、今回の実習で人数確認や体調確認の必要性について理解することができた。親子説明会のときや出発するときただの指導員である私に、保護者の方から「子どものことをどうかよろしく願います。」と言っていて、子どもたちのことをとても心配しており、送り出すのも勇気のいることなのだと感じた。そのため、人数確認は私たちが信じて送り出しをしてくれた保護者の方々からの信用を失わないためにとっても大切なことであることが分かった。
- ・出発するまでは自身の班のことは自分達で解決しなければいけないとっていたが、自分の班担当の児童館職員が別の班の先生を頼っていたり、他の班の先生から自分が頼られたりする経験をして、背負いすぎずにまわりを頼った方が自身の負担にならず、子どもたちの安全も確保できることに気づいた。

○今後の展開、今後の学び

自身の担当した班の中に、指示を聞いて指示通りに動くことが難しかったり、動きが遅く、みんなについていけない子がいた。今回の実習では基本的に14人の子どもたちに対して3人の指導者がついていたので、そのような子に教員を一人付けたり工夫することで全員がついてこれるようにすることができた。しかし、小学校という実際の現場に配属されたときは、約30人の子どもたちに対して1人の担任の先生しか就かないため、どのようにまとめていけばよいのかを考えることが今後していかなければいけないことだと思う。

○まとめ

この実習を通して、自分は何の職に就きたいのかを再度考える機会となった。今までは小学校か中学校か高等学校の教員となるという3択でしか考えたことがなかったが、子どもたちに関わる仕事というのは、児童館職員や市役所の児童青少年課などという選択もあることが分かった。FS当日から事後学修までの期間では将来のことを考えるには時間が足りなかったため、これからいろいろな授業を受けていき、さまざまな経験していく中で考えていきたい。この実習では教員以外の道もあるということが分かっただけでも大きな進歩だと思う。

○担当教員コメント

○今回の一泊二日のキャンプで、子ども達と遊び、体験し、食事や風呂、就寝等を共に過ごす中で、自分の将来の仕事についての視野が広がったと感じる。

○児童生徒を指導する際の指導者としてのスキルを学んでいた。

今回のキャンプの中で「安全安心の重要性（体調管理も含めて）」「子ども達のへの指導のスキルの大切さ（話の聞かせ方、注目のさせ方）」「一人ひとりの子どもの様子を把握することの大切さ」「他の人との関係の大切さ（瀬K人の分担や連携問う）」等、指導者として心掛けることや指導スキルを学んだことは、高校教師や小中学校教師、児童館員等、児童生徒に関わる仕事に役立つことに気が付いたことは大きな収穫である。

○今回のキャンプの経験を、将来の仕事を考える際の参考にしてほしい。また、今回の体験や学びを、今後の学びに生かして欲しいと考える。